

《書評》

安野直著

『ロシア文学とセクシュアリティ—二十世紀初頭の女性向け
大衆小説を読む』

(群像社、2022年、313頁)

Roshia bungaku to sekushuarite: Nijusseiki shotō no jōsei muke taishū shōsetsu wo yomu (Russian Literature and Sexuality: Reading Popular Fiction for Women in the Early Twentieth Century). By Yasuno Sunao. Gunzōsha, 2022.

『ロシア文学とセクシュアリティ』は、博士学位論文「〈性〉の境界を読み解く——二十世紀初頭のロシアにおける女性向け大衆小説とジェンダー」をベースに加筆修正された安野直氏の単著である。安野氏は博士後期課程在籍中の2019年に最初の単著『ロシアの「LGBT」——性的少数者の過去と現在』を出版しているので、本書は安野氏の単著二冊目となる。外国語文学のアーリーキャリアの研究者としては、それだけですでに特筆すべき業績である。

本書の主たる想定読者は、タイトルに明示されるように、おそらくロシア文学文化研究者、あるいは、ロシア文学について知りたいと願う人だろう。しかし、その潜在的読者はロシアに関心を持つ者に留まらないのではないか。20世紀初頭のイギリス文学を専門とする筆者が思うに、本書は、西欧文学および文化を研究する者を含め、もっと幅広い潜在的読者がいるのではないか。本書評では、本書の概要を「銀の時代」との関係から整理した上で、その理由を述べてみたい。

本書の射程は、20世紀初頭のロシアにおける女性向け大衆小説であるが、この時代は、ロシア文学においては「銀の時代」と呼ばれてきたと言う。海野弘氏の『ロシアの世紀末』によると、「銀の時代」とは、時代としては世紀転換期から帝政時代が終わる1917年までの20世紀初頭を指す。海野氏曰く「銀の時代」とは、プーシキン、ドストエフスキー、ゴーゴリ、トルストイ、ツルゲーネフら19世紀の文豪が活躍した「金の時代」でもなく、ロシア革命以後のロシア・アヴァンギャルドの時代でもなく、文学的に目立った二つの時代の間だはざまという。いわば、『ロシア文学とセクシュアリティ』が光を当てる女性向け大衆小説とは、ロシアの古典文学の枠組みから特段語られてこなかった作家・作品・発表媒体を指す。

序章「20世紀初頭の女性向け大衆小説とジェンダー研究」では、まず、そうした「銀の時代」のロシアの政治的・社会的・法的状況がジェンダーの視点から概観される。議論の前提として確認されるのが、ロシアへのフランス啓蒙思想——具体的に言及されるのはジャン＝ジャック・ルソー——の影響である。周知のとおり、ルソーは『社会契約論』などの著作で民主主義的思想を記したが、他方で、男女の性的差異を強調したことでも知られる。彼は、女が家事と家族の世話をするのが「自然と理性が女性に命じる生きかた」だと述べ、良妻賢母規範を強化する思想も有していた(26)。現実には農村教師などの労働に従事する者がいたにもかかわらず、家庭のなかでは良き妻・良き母となることを理想とする良妻賢母思想は、ルソーの啓蒙思想とともに、18世紀から19世紀前半のロシアに女子教育の理想としても拡散されていった(27)。こうした西欧発の思想が、「純潔」を美德と語るニコライ・カラムジンなど同時代のロシアの作家による著述にも読みとれることを、本書は指摘する。

思想だけでなく、法律も女たちの自由を制限した。夫婦の同居義務、夫の住所変更時の随行義務、夫の許可を必須とする雇用関係、国内旅券取得の制限、離婚要件の厳格化(実質的に離婚できない)に加えて、既婚女性の夫への経済的依存が高まる法律もさまざまに導入されていった(27-28)。さらに、警察・

医療によって娼婦・娼家が管理され（28-29）、中産階級以上の女たちの居場所が家庭に配置され、男女の空間が分断される。いわば、女同士は階級によって分断されていったのだ。このように近代的ジェンダー分業体制が強化される一方で、1861年の農奴解放によって、夫婦や親子関係においても家父長制的色合いは薄れていったことが、本書では言及される（29-30）。「男性を仕事に、女性を家庭に割り振るジェンダー分業体制は、西欧ほどには強固なものではなかった」にしても、「本書の考察対象となる女性向け大衆小説が書かれた20世紀初頭のロシアでは、ある程度、西欧諸国と相似形をなした性秩序が成立していた」（29-30）。

文化的かつ社会的に興味深いのは、ほぼ同時期に大衆読者が登場した点である。本書によると契機は二段階あった。まず、アレクサンドル二世による改革後の19世紀後半以降、とくに1870年代から80年代に掛けて読者人口が急激に拡大する。その時に売り上げを伸ばしたのが、今日、当時の文学現象として知られる象徴主義などの「高級」な文学作品ではなく、「軽い読者」のための大衆的な作品であった（33）。次に、1905年の革命以降の検閲の廃止である。これによって、自由な表現が可能となり、セクシュアリティを主題とした作品が多数発表されていった（17）。このような流れで1905年の革命以降、民衆読者が爆発的に拡大していく。こうした新たな読者の登場と拡大はロシアだけというよりも、18世紀末から19世紀に欧米で起きた出来事の一つとして捉えるべきだ（34）という指摘に、英文学を研究する者として書評者は強く同意する。

以上のように、たしかに20世紀初頭のロシア文学は革命という独自の文化的影響のもと発展したと言えるが、しかし、ジェンダーの文脈から読み返すならば、ロシアは西欧諸国の文化と無縁ではない。それが、序章で示された本書の枠組みである。

ロシアと西欧の文化的接点を序章で示したうえで、続く第1章「女性向け大衆小説のベストセラー化とフェミニズムのパラドクス」で提示される問いは、ロシアにおける女性解放運動は欧米のフェミニズム運動とは異なるのか、とい

うことである。そのために議論の俎上に載せられるのが、絵入り雑誌『ニーヴァ』と書誌情報誌『ヴォリフ書店ニュース』である。19世紀半ば以降の市場経済の発展、それに伴って新たに登場した読者層——とくに都市部のミドルクラス——、女性解放運動の盛り上がりという政治的社会的文化的状況から、20世紀初頭のロシアでは、貴族、聖職者、商人、農民のような階層が崩れ、専門職、企業家、芸術家などの新たな社会集団が創出された。このような新しい時代の新たな読者層の期待に応えるように登場したのが雑誌という媒体であった。本章でまず取りあげられるのは、新しい読者層に向けて作られた雑誌『ニーヴァ』である。同誌は、オーデコロンや石鹸、美白剤など「健康的な女性美」(63)を商品広告によって喧伝すると同時に、当時の女性解放運動の盛り上がりを受け、ロシアにおける女子教育の成功例も掲載した。いわば消費社会の到来の中で、男女同権の主張が展開されていったのである。しかも、そうした傾向は『ニーヴァ』のような大衆誌だけでなく、『ヴォリフ書店ニュース』のような文芸誌も同様だった。同誌は、小説の近刊紹介などによって文壇の流行を紹介して女性作家の特集記事を出し、安野氏が著作後半で議論する女性作家たちを批判しつつも、同時に彼女たちの文学的可能性を示したという。そのような文芸誌においても『ニーヴァ』同様に広告が掲載されていた。

以上の議論はつまるところ、20世紀初頭のロシアで女性向け大衆小説がベストセラーになったのは、雑誌や映画を含むマスメディアが視覚などを通じて、新たな大衆読者の欲望を喚起し、消費の主体となる女らしさを構築していたことを示すものだ。このような1章の議論から、ロシアの特殊性を強調してロシア文学におけるフェミニズムを論じる従来の手法に慎重になるべきだという主張が提示される(82)。

ロシア文学と西洋文学の近似性(序章)とロシア文学の特殊性への疑義(1章)という議論が提示された後、第2章から第4章では三名の女性作家作品が分析される。第2章で論じられるナグロツカヤの代表作『ディオニソスの怒り』(1910)は、ドイツ語やフランス語、イタリア語にも翻訳されたベストセ

ラー小説である。西洋諸国でも広く読まれたナグロツカヤの作品がここでは、イギリスに起源をもつ「新しい女性」表象という文脈で読まれる。本書によると、ロシアで「新しい女性」が登場するのは20世紀に入る以前、女性解放運動が盛り上がる1850年代の終わり頃からだったという。その表象は、「現実の世界における性をめぐる諸関係を問い直す女性解放運動に共鳴する自立した人々を、文学作品のなかに理想の女性像として形象化させたものであり、現実と創作世界とを架橋する女性解放の象徴であった」（99）。ソ連時代に世界初の女性大臣となった政治家で、『新しい女性』（1913）を執筆したことでも知られる著述家のアレクサンドラ・コロンタイによると、ロシア文学における「新しい女性」とは、「女性の権利のために闘争する精神的自立と、男性に依存しない性的主体性を獲得した女性」を指す。安野氏は、その定義に依拠しつつも、その内実は一枚岩ではなく「書き手や批評家の性（ジェンダー）や社会・文化的背景を個別に精査していく必要がある」（100）と留保を付けた上で、『ディオニソスの怒り』を「新しい女性」小説として解釈する。

『ディオニソスの怒り』は、「男性らしい」とたびたび形容される女性主人公ターニャが二人の恋人——「理想的男性として憧憬の対象」（117）のイリヤと「女性らしい」スタルク——との間で揺れ動くという典型的な異性愛恋愛小説である。批評家の意見が分かれるのが、芸術家を志していた女性主人公ターニャが、その志を捨て、子育てに専念するという結末部分である。従来、本作は「ジェンダーの境界の曖昧化」という言葉で説明されてきたが、そうした解釈を安野氏は、本作の転覆可能性を見逃すとして疑義を投げかける。

安野氏の大胆な解釈は次のようなものである。大衆小説という本作の性質上、異性愛の恋愛小説プロットおよび身体的性（セックス）の制限は装置として必須である。そのため『ディオニソスの怒り』は、異性愛ロマンスを形式上は維持する。一方で、メタファーのレベルで女性主人公は身体上の性を超克し、新たなジェンダーを手に入れている。議論の詳細についてはぜひともご自分で本書をご確認いただきたいのだが、つまり、解釈のレベルで『ディオニソスの怒

り』の女性主人公はジェンダーを「転換」しており、それが「新しい女性」小説としての同作品の到達点だと安野氏は解釈するのだ。

3章「ヴェルビツカヤ『幸福の鍵』における「死」と「幸福」」では、フェミニズムや社会運動に従事したヴェルビツカヤのベストセラー小説『幸福の鍵』が、妊娠・出産の描写の分析によって、性規範への疑義を投げる作品として読み解かれる。『幸福の鍵』は、女性主人公がダンサーとしてのキャリアを確立していくことから教養小説の系譜に連なる作品としても解釈可能だが、ここで注目されるのは、女性主人公が自殺するという悲劇的結末である。自殺や殺人、発狂などで終わる結末は「ロシアン・エンディング」と呼ばれ、ロシアのメロドラマでは好まれてきた(135-136)。安野氏は、このロシア文学の典型ともされる自殺という結末を、単なる悲劇あるいはメロドラマと捉えず、むしろ、本書のロマンス的プロットに注目してフェミニズム的な読みの可能性を探る。そして、第一に女性主人公が女性性を拒否する「男性的な女性」という非典型的なジェンダーであること、第二にロマンス小説のプロットが破壊されていること(結婚というハッピーエンディングではなく主人公の死)、という二つの点で、本作は、表層上は異性愛のメロドラマであったとしても、生殖を前提とした異性愛へのアンチテーゼを示しているという読解が提示される。

続く4章「チャールスカヤの少女小説における「冒険する少女」たち」では、2章と3章が成人女性の物語だったのに対して、少女小説が取りあげられる。本章で論じられるリディヤ・チャールスカヤによる『寄宿女学校生の日記』(1908)、『小公女ジャヴァーハ』(1903)、『シベリア娘』(1908)という三つの少女小説の舞台は、19世紀米国の代表的少女小説『若草物語』(1868)のように家庭ではなく、寄宿舎やサーカス団といった共同生活の場である。チャールスカヤの描く少女登場人物(男装する少女、黒人の少女)は、生殖=再生産をとまなう血縁的な家庭から逃れ、それゆえ女らしさの軛からも逃れ、血縁によらない共同体、つまりは、新たな共同体を形成するのだと、結論付けられる。

本書のなかでもっとも長い紙幅が割かれる5章「男性同性愛をめぐる言説

の構成と変容」は、「銀の時代」における性科学と宗教思想を基盤としたロシアの性愛論という二つの言説を参照しつつ、象徴主義と大衆小説における同性愛表象の記述の違いを議論する。本章で取り上げられるのは、「銀の時代」に発表されたミハイル・クズミンの『翼』(1906)、2章で論じられたナグロツカヤの『ディオニソスの怒り』および『ブロンズの扉のそばで』(1914)である。ロシア語版『ブロンズの扉のそばで』は検閲のために一部伏せ字で出版されたので、その部分を補うために、ここではドイツ語の翻訳版(1913)も参照される。本書に従うと、20世紀初頭のロシアにおける同性愛言説は、19世紀以降の西洋社会における性科学の流入によって病理化される。他方、性愛思想において男性同性愛は生殖=再生産によらない人類の発展のための、新たな性愛のあり方——「新しい人間」世界の構想というユートピア的ビジョン——を示す表象として位置づけられていた。このような状況を踏まえて、本章では、同性愛表象を描いたロシア文学として有名な『翼』と、その作者と個人的な交流があったナグロツカヤの作品が論じられる。本章の詳細な議論の結果示されるのは、「銀の時代」の同性愛言説は西欧からの性科学とロシアの性愛論の両者の影響を受けて形成されていたことである。

以上、理論的枠組みを示した序章と1章、作品を論じた2章から5章の議論によって、女性向け大衆小説は〈性〉の境界を強化し、男女二元論へと収束されていったと本書は結論付ける。ただし、本書が重視するのは、女性向け大衆小説や雑誌がただそうした二元論に取り込まれていたことではなく、これらの作品の平易な言葉、分かりやすいプロット、魅力的な販売促進活動を通して「これまで大衆には届いていなかった〈性〉をめぐる言説が、小説とともに市井の人々に広まっていった」ことである。「その点において、大衆女性作家たちの創作は、女性読者たちをつよく惹きつけたのであり、その魅力を支えたのは「高級な文学」や男性の論理に対する「弱者の技」であったのではないだろうか」(270-271)と述べる。つまり、女性向け大衆小説を分析してきた本書が示そうとしたのは、ビジネス、思想家、医師、性科学者ら「強者」の言語や

規範を取り込み——たとえ、それが時に異性愛の強化になりえたとしても——、「内部から規範を揺るがし、オルタナティブな〈性〉のあり方を呈示した」(272) ことだった。本書に言及されているわけではないが、この最後の安野氏の指摘は、ジュディス・バトラーの乱交的な服従と言い換えてもよいのだろう。

上記の『ロシア文学とセクシュアリティ』の概要は、イギリス文学を専門とする書評者の関心と理解に基づいているために、もしかすると安野氏の意図とズレがあるかもしれないが、少なくとも、本書が示そうとしていると筆者が理解したのは、20世紀初頭のロシアのポピュラー文学は、ジェンダー・セクシュアリティの視点とともに、西洋文学文化との関係から再考察されるべきだ、ということである。スーザン・バック＝モースの『夢の世界とカラストロフィ』(2002)などを代表として、近年の欧米の文化研究においてロシアなど(旧)社会主義国との接点を探る研究が盛んであることを考えると、このような本書の構想は極めて説得力がある。だからこそ、本書がジェンダー、セクシュアリティの観点を論じる時にジョーン・スコット(歴史学研究者)、イヴ・コゾフスキー・セジウィック(クイア批評家)、竹村和子(米文学かつフェミニズム批評研究者)など英語圏の批評家や研究者を援用すること自体に意味があったと、筆者は考える。なぜなら、安野氏が『ロシア文学とセクシュアリティ』でおこなったのは、「銀の時代」のロシアの作家作品の分析が、英語圏のジェンダー・セクシュアリティ・フェミニズム批評によっても分節可能であることを示したからであり、それはすなわち、ジェンダー研究、ロシア文学、西洋文学文化研究を学際的に接続しうる可能性を拓いたからだ。その意味で本書は、ロシア文学以外を専門とする人にも大きな意味を持ち得る。

しかし、だからこそ、「銀の時代」の分節化が明示的でなかったことが残念でならない。なぜなら、簡単な説明は序章でなされるものの、「銀の時代」に関する議論が十分には思われなかったからだ。少なくとも、ロシア文学を専門としない筆者のような読者には、冒頭で引用した海野氏の著作の助けなくして

は、その要諦を理解することが困難だった。専門家に向けられた著作であることを承知しつつも、このように述べるのは、「銀の時代」がイギリス文学におけるモダニズムと呼ばれる文学思潮と合致するように思われるからだ。2000年代あたりからのダグラス・マオラをはじめとして、英語文学においてはモダニズムを拡張的に読み直す試みが盛んである。その研究の厚みを知っている者としては、同様の議論がロシア文学の「銀の時代」についても（おそらくは英米のロシア文学研究者によって）展開されているのではないかと思われてならない。本書が、「銀の時代」というロシア文学固有の概念整理を序章にもう少し丁寧に組みこんで、文学文化的背景をマッピングすればよかったのではないか、そうすれば、本書が論じてきた作品が、19世紀的な大作家の金の時代にも、実験的でハイブラウたちの象徴主義の銀の時代にも当てはまらず、それゆえロシア文学の正典から除外されてきたことが一層明示されたのではないか。またそうすれば、さらに想定読者が広がったのではないか。専門外の書評ゆえの外れの指摘であればお詫びするほかないが、筆者は、そのような疑問という名の期待を抱いた。

少なくとも、そんな期待を抱かせるくらい本書は、ロシア文学に精通していない者にとっても、魅力的な研究書であった。なぜなら、本書の学術的功績は、ロシア文学の特殊性に疑義を投げかけただけではないからだ。西洋文学とロシア文学とを連続体として捉えた本書の議論は、「西洋」文学とセクシュアリティの関係性も問い直すことにつながっているはずだ。ジェンダー、セクシュアリティ、フェミニズムに関心のある西洋文学の研究者や愛読者は、本書を手に取り、ロシア文学とのつながりからご自身のこれまで読んできた文学をぜひ再読してほしい。そうした文学研究者の学際的な研究および批評的営みが、ジェンダーの、そして、グローバルな現代の問題への応答につながると信じている。

引用文献

海野弘『ロシアの世紀末——〈銀の時代〉への旅』新曜社、2017年。